

■教育時評

音楽教育をゆがめるもの

山崎昌甫

東京都だったり、恐らくどこへいっても〇〇音楽教室のおかれていない地区はないだろう。数は少ないかも知れないが、全国の中都市以上のところでも、これと似たりよつたりの状況がみられるだろう。当然、そこに通う子どもは相当なものだろうし、これを指導する教師も馬鹿にならぬ数にのぼるのではないだろうか。

音楽教室の開設は、適当な広さの場所に開設したばあい、採算のとれる位の生徒数が確保できればよい。こうなると、幼稚園がその条件にピッタリということになる。勧誘と申込、そして契約が成立すれば、オルガンと教師が送りこまれて、週2回の音楽教室がはじまる。オルガンは場所と生徒を集めて彼等から授業料を徴集し、授業のためのセフティングに若干の労力とを提供すれば、何か月か、あるいは何年かするうちに自動的に提供者のものになる。

音楽教室の授業は、唱歌、聴音、オルガン奏法からなっている。一回の授業は十人内外を対象に一時間近くおこなわれる、年令も満四才以上ならできる。これは今までのピアノを習う、という条

件とは相当に違った音楽教育現象だといえる。その特徴は、

先づ第一に、オルガン奏法と並んで、ハッキリと唱歌、聴音をカリキュラムに組んでいることである。

第二に、これを集団的に指導していることである。そして第三は、授業料が安く、週二回あるということ。

従来、ピアノのレッスンといえば、初歩の段階ならばバイエルとかメトドロースなどの教則本によつて、ピアノ演奏のメカニクが一對一の関係で教授され、唱歌、聴音はほとんど例外的にしか教えられなかった。この段階のレッスンは、ただか二十分〜三十分たらずで終つてしまふ。ピアノ演奏のテクニクの完成が目的のだから、これらの教則本に頼りて、ハノン、チェルニー、ソナタ、ソナタといったオーソドックスな学習コースが展開する。これと並んで、音楽性をたかめるといふ意味で、ブルグミュラーとか「エリーゼの為に」などのピースものが、そのつど併用される。このようなメカニクの徹底とテクニクの完成は、したがって、職人的名人芸とか名人(Klavervirtuose)を理想像としているといわれるゆえんである。練習を怠ることは勿論、教師をこえることもメカニクの崩壊を意味するから極度に排斥される。このような修業過程が、日々

近代学校制度での教授学習過程と照らし対照を示さないことは容易に想像できる。

〇〇音楽教室の音楽学習が、形態的にオーソドックスのピアノレッスンと質的に違ふことは以上みてきた通りである。学習形態の違いというのは、勿論外見的なものではなく、方法の内容が異なっているということではなければならない。一方の極に公教育機関でおこなわれる、集団的ないわゆる国民のための音楽教育があり、他方の極にレッスンと総称される一對一のビルトウオーソ養成とがあるとする、〇〇音楽教室の音楽教育は一体どんな性格のものだろうか。これを明らかにするには、前にあげた三つの特徴が、果して他の二つの音楽教育様式に対して、独自の存在意義を主張しうるに充分なものであるかを検討する必要があるだろう。

それぞれ二つの教育様式を、その伝統と成果のゆえにそのまま認めるとすれば、音楽教育方式はその意味でメエ的存在だといえる。それでは何がメエであり、そのメエは誰を対象に何を目的としてあるのか。

メエは電動オルガンであり、対象は中産階級の幼児〜母親であり、目的はオルガン、ピアノの販売である。教師はこのばあい、セールス・エンジニアの役割を果す。

見詰めオルガン、というよりオルガンの生産は、ピアノの需要の上昇に伴つて、教育用以外は

ほとんど伸びなかった。ところが、電動オルガンの開発は新中間層の増大とあいあつて、二大楽器独占資本によるオルガンピアノ販売作戦の戦術を可能にした。オルガンピアノ販売作戦の戦術として、音楽教室が浸透作戦の橋頭堡の役割を果している。この戦術をあみ出すに当つて、教訓となつたのは、後に桐朋音楽大学にまで成長した「子どものための音楽教室」での成果である。

そこでは唱歌、聴音は集団的にやつていたが、オルガンではなくピアノをオーソドックスな方法内容で教えていた。これは今でも続いているが、そこには上野的(東京音楽高校「芸大音楽学部」)な苦しいアカデミズムに対抗し、新しい音楽息

教育機関建設への積極的な意欲が流れていた。これが、例えば、一つの典型をあげれば、桐朋音楽大が短大当時まで採用していた、オープン・システムといわれる新しい、しかし、余りにも日本的で、合理的なレッスン形態を生み出したのだらうし、現在、日本のピアノ演奏家の若手のトップクラスの大部分が桐朋出身によつて占められようとしている、という現象を生み出したのである。つまり、桐朋的な教育方式が専門家的音楽教育様式の二極分解をひきおこしたのである。上の極が桐朋学園の音楽コースであり、下の極が〇〇音楽教室である。しかも、この二極分解には、

教育時評

前者には個人的なつながりではあるが、旧財閥の流れを直接くむ独占資本の後光が多かれ少なかれ

影響しているし、また後者には前述した二大楽器独占資本が、シノギをけずつていて、正に日本のな特徴といえよう。前者は極端なエリート化が、後者では広範な大衆文化現象の中間階級の表現を見ることができ、ともに国民教育を構成する音楽教育たりえないのではないだろうか。

電動オルガンは新中間層にとつては、決して買えないものではない。しかも、足踏みではないから幼児でも演奏できる。今までは幼児はピアノでしか練習ができなかった。ピアノでなくても、ピアノの勉強ができる。楽器独占資本にとつては、「ピアノを置く、弾く」ということに強い憧れをもっている中産階級の母親に喰ひこむ、強力なセールス・ポイントをつかんだことになる。「すぐ

にピアノを買わなくても、このオルガンで勉強して、上手になつたらパパにピアノを買つていただきますようね」。オルガンの奏法とピアノのタッチとは本質的な違いがあるし、バイエルを終る頃になれば鍵盤数が足りなくなることは目に見えている。しかし、このことは、このばあい母親にとつては問題にならない。だが、ここに楽器独占資本の販売戦略上のキイポイントがあるのだ。

教育的には問題にしない。むしろ、音楽教室の普及による音楽文化の向上のゆえにやがて〇〇渡章をもちうかも知れない。たしかに、これらの音楽教室で使用している教科書は、従来のものに較べればいろいろな面ですぐれた長所をもっている。

しかし、オルガンの専門家が作つたものでもないし、合奏・合唱ができるようなものでもない。將來、一貫してオルガン演奏の学習ができるように編纂されているならまでも、多分にピアノ学習的である。メエそのものには重大問題である。影響する範囲が広いだけに。

その集団指導にも問題がある。対象は幼児が大部分なので、母親と一緒に、多くのばあい、母親は子供の直後にビツタリついて、先生の指示を間接的に子供に伝えている。先生は大部分が音楽の専門コース、つまり音楽学部の出身であるから、幼児の集団指導についてはほとんど知識も経験も持ちあわせていない。それだからこそ、母親がアシスタントとして必要なのだ。恐らく音楽の集団指導の望ましい成果は、合唱・合奏を通して始めて結実するのではないだろうか、音楽教室の集団指導は誠に奇妙な風景だといわざるをえない。

最近、先進的な音楽教師たちによつて、コンクール目当てでない、音楽教育の改革をめざした実践が積みあげられている。すぐれた教師の実践の成果と、母親たちの自分の子を賢くする熱意が組織的に結びついて、国民的な盛りあがり期待するには、音楽教育の領域でも独占資本の不当な教育支配に対決してなければならないのではあるまいか。

(国立音楽大学)